

隨筆「これからの技術屋」

水 野 鎬

一體事務屋と云ひ、技術屋と云ひ、元來はつきりした區別があるべきではないと私は考へる。事務屋でありながら、技術屋に近い仕事をしてゐる人もあるし、之れと同じやうに、技術屋で、殆ど事務屋と考へてもよい仕事をしてゐる人も澤山ある。

最近のやうに、世の中が非常に複雑になつて來ると、事務屋も、技術屋も、共に自己の専門以外の事を、諒解してゐる必要があり、少くとも、事務屋は技術屋の事を、技術屋は事務屋の仕事を、一般的に常識として、わきまへてゐなければならぬ時勢だと考へる。

大體事務屋と技術屋の區別なるものは、學校系統から分けて見れば、一番はつきりする。工業學校關係の人は、無論技術屋であり、之れに對して、法、政、經、商科出の者は所謂事務屋である。勿論人間に純然たる技術屋、純然たる事務屋といふものは、ないはずであつて、性格上兩者が如何なる違ひを持つてゐるかといふ事は簡単に指摘さるべきでないと思ふにもかゝらず、世間では、極端な事務屋型の人と、極端な技術屋型の人とを較べて、兩者の性格にかなりの相違を持つてゐるかの如くに言ひふらす。そして技術屋と言へば、むつゝりして居つて、餘り口もきかず、こつこつと機械や、試験管ばかりを、いじくつてゐる者を聯想し、明朗快活、口八丁、手八丁、大言壯語、誇大妄想狂が、事務屋であると思ひ込んでゐる。

事務屋には見受けられぬ事だが、技術屋には、自己の優れた個性をも無理に没却して、むつゝり型に入り込まんと努力してかの如くに見受けられる人もないではない。

斯る空氣があれば、必然的の結果として、一層技術屋なるものは、何時も事務屋の下に置かれる事となる。一國の盛衰が技術の發達如何に依つて、ある程度左右されるといふのが現今の世界情勢である。其の一例は我が滿洲國に於ても考へられるが、滿洲國今日の隆々たる發展は國內百般の建設、開拓兩部門に於ける、技術屋の驚くべき、努力と盡力の結晶が與つて力ありと信ずる。如何に事務屋があせらうと、騒がうと、結局頼るべきものは、技術であつて、かんじんな技術部門が遅々として進まなかつたら、滿洲國今日の大發展はあり得ないと言つても過言ではなからう。

將來も之れと同様に考へてよいと思ふ、勿論技術其のものは結局は經濟に依つて、左右されるものであり、同様に經濟も技術の如何に依つて、左右されるのであるから、此の邊の問題は、かなり複雑性があり簡単に言ひかねる。一寸桁は違ふが所謂新東亞の建設なるものも、分解に分解を重ねて行くと、結局技術如何が大切な項目として残り、技術屋の使命は益々重大性を帯びて來る。扱て、然らば上記の如き重大使命を持ち、現在活躍し、又將來活躍せんとする技術屋は如何にすべきかといふ問題を検討して見る必要があると思ふ。